



イカルスII

高本 淳

突然のショックの後モニターが真っ赤に燃えあがったとき、まるでそれを予想していたかのように冷静だったのはいま考えても不思議だ。つまりそれは船内に高温部分が出現したことを示すセンサーからの警報で……船体表面のどこかで超伝導性が失われたっていう、およそ考えられるかぎり最悪の事態を意味していたんだから。ちようどそのとき『イカルスII』は侵入軌道上の〈朝〉を迎えたばかり。とっさに全制動をかけ、強引に〈夜〉に飛びこみ何とか破局は逃れたものの、すでに自動操縦装置は動かず『ロキ』めがけて石みたいに落ちていく船をほくは手動でランディングさせなくちゃならなくなった。一面に明るい空と目印というものを一切欠いた地表はいつだって距離感を絶望的に混乱させる。現在の高度が地上数キロなのか、それともただの数メートルなのか、どんなに目をこらしたってわかりはしない。しかも着陸間際になって今度は噴射制御システムまでもがいかれる始末。

それでも対地レーダーのけたたましい警報音と融合エンジンの絶叫のなかで『イカルスII』は無事着陸した。こりゃあ、生涯の自慢にしていいだろう……ただ予定地点からは千キロほどずれてたけど。

パネルを開いたとたんうんざりして空調を〈最強〉にあわせ周囲のオゾン臭が薄れていくあいだ椅子に座り込んで両手で頭を抱えたポーズで待つ。

……途方に暮れた宇宙パイロット。

そんな台詞が頭のなかにちらつきほくは突然身震いして立ち上がった。この現実がなぜか妙に自分にそぐわしいものに感じられたんだ。

エンジンはたぶん始動可能。……でも侵入した熱で制御回路が完全に焼き切れている。もはや『イカルスII』は飛び立ったら最後までここにすつとんで行くかわからない打上花火だ。気違いじみた加速で突進したあげく融合燃料を使い果たして外宇宙へ漂い出していくか、あるいは『フレキ』の中心核深く突っ込んで真っ黒焦げになるか……衝動的に噴射スイッチを押してしまわないようにそれをしつかりと頭に刻みつけておかなくちゃならない。

不幸中の幸いはすぐに生命にかかわる事態ではないということ。補助動力で生命維持システムは動かせるし酸素も水も食料も使い切れないほどある。ただひとつ問題は……。

ほくは外部モニターを恨めしくにらんだ。

熱だ……。

外は絶対温度千度以上。船体を包む鏡面シールドは高エネルギーの光子は反射できても絶え間なく吹きつけるプラズマそのものからの熱伝導は防げない。ヘスピンアイス^{ヘスピンアイス}なしには超伝導の船殻表面がいつせいに溶解しはじめるまでわずかな時間しかない。そしてあいにくヘスピンアイス^{ヘスピンアイス}はエントロピーを永遠に逆転する魔法の物質ではないときてる。

「……それは言わば『逆さまに凍結された強磁性体』だ」

もうずいぶん昔になってしまった訓練期間中の技術講習をほくは必死で思い出そうとしていた。

「ヘスピンアイス^{ヘスピンアイス}は低エネルギー状態で常磁性を示すにもかかわらず高エネルギー状態では強磁性を示す、という奇妙な性質をもっている。それはあたかも熱力学の第二法則に逆らうような振舞いをするわけで、それゆえこれを『逆説磁性体』と呼ぶ者もいる」

その講師役の上官は最前列のほくを見つめ、こちらはといえはい

かにも聡明そうな微笑を口元に張り付けて内心の当惑を押し隠していた。

「……あるいはヘスピンアイス」とレーザーの類似性に注目してもらってもいい。それは結晶工学的手段によってあらかじめ金属原子構造のなかに実現されたへ反転分布だ。ヘスピンアイスへはランダムな分子運動としての熱エネルギーを吸収して自己組織化……すなわち磁化する。そしていったん磁場が形成されると各原子のスピンはそれに対して整列しようとするから外部から強制的に消磁されないかぎり吸収された熱が外へ出てくることはない」

「詐欺みたいだ」思わず呟いてしまっただけはあわてた。でもどうやらそれはちょうど講師が聞き手から引き出したかった反応らしく、彼は得たりとばかりに微笑んだ。

「……それが詐欺でないのはちゃんと人間は自然に対して支払いをしているからだよ、ウォーカーくん。ヘスピンアイスへの秘密は膨大なエネルギーを消費した結果得られる低エントロピーの結晶構造にある。……ヘスピンアイスは「冷たい」のだ。それは途方もなく「冷たい」。……恒星内部で諸君を十分冷やせるほどにね」

それから彼は最後に警告を付け加えたんだ。

「しかし忘れないでほしい。われわれは無限に熱を処理できるわけではない。臨界点に達すれば結晶構造は崩壊しそれまで吸収された熱は一挙に放出される。……君たちがまず覚えておくべきなのは、その時がきたらヘスピンアイスへの近くにおいてはならない、ということだ……」

そして『イカルスⅡ』のヘスピンアイスへには臨界が迫っていた。

スピーカーから雑音に交じってガワガワと蛙が鳴くような音がし

ていた。やがて補正回路が働き出したらしく、どうやら人間の声らしいものが聞こえはじめた。

「……ルスⅡ」。……ますか？「イカルス……」

ほくは深呼吸一つ、声が震えないように祈りつつゆっくりと答えた。

「こちら「イカルスⅡ」。聞こえます。「プロメテウス」、どうぞ」

「……ック・ウォーカー……よかった。どうやら無事のようなね。わたしは救助班長のアン・レイノルズ」

「お話しできて光栄です。レイノルズ博士」

「アニーでいいわ。あなたが沈着冷静なのは結構なこと、ロッド。パニックを起こしていても不思議ではない状況なのにね」

「パイロットは孤独な仕事です。……アニー。もとより一人で死ぬ覚悟は出来てますよ」

あまり説得力ある口調ではなかったらしい。わずかな沈黙のあと博士は続けた。

「……必ずしもそうとは言えないだろうし、またそう決めつける必要もないわ。こちらでは全員あなたを助け出す方法を必死で捜しているところよ。運悪く予備のバギーは極観測ステーションの事故で出払っているけど……希望は捨ててはだめ。とにかくまずそちらの状況を報告しなさい」

ほくは今「イカルスⅡ」が直面している問題について手短かに説明するにつけ加えた。

「運を天にまかせてエンジンを始動してみるつもりです。積み荷を救えるかも知れないし、少なくともこの場所で徐々に蒸し焼きになるよりましですから」

「うーん……でも、それは賛成できないわね。制御回路なしでは万

にひとつも助かる可能性はないわ。おそらく最初の加速の衝撃であなたは殺されてしまうでしょう。あのヒロミのように……お……」

博士は突然真相に気づいたようだった。

「ロデリック・ウォーカー……！ あなただったのね」

きつとほくは苦い笑いを浮かべていただろう。

「ええ……ヒロミ・テラシマはわたしの友人でした」

たぶんへ婚約者〜というべきであったかも知れない。でもほくはまだそれについての気持ちの整理がつきかねていたんだ。

きつと「フレキ」の不可解な磁場の働きが産み出した高エネルギー荷電粒子が「イカルスⅢ」の回路を暴走させたのだ。その姉妹船が十G加速で「ロキ」の軌道を飛び出したときからすでにほくはもう彼女のことを諦めていた。耐高Gウォーター・ベッドに横たわっていてさえせいぜい八Gが限界であるのにヒロミはおそらく堅い床に投げ出されたまま体重の十倍の力で押しつけられている……ほとんど呼吸すらできないはずだった。

磁場のなかで天使がサイクロトロン運動しているあいだ、しばらく沈黙が続いた。

「気持ちはわかるわ……。でもロッド、自分の運命を彼女のそれと重ねあわせて見ないように。『フレキ』はこれまで幾人かの人間の生命を奪ってきたけれど、あなたの名前を犠牲者リストに加えるつもりはありませんからね。エンジン始動はスピンアイス臨界時での最終手段とします。……これは上官としての命令と心得ること」

「……了解しました」

とはいえ本当に博士が自分の気持ちをわかっているかどうかは疑わしく思う。二週間かけての「イカルスⅢ」とのランデブー。

そしてヒロミの遺体をこの手で宇宙葬してからさらに補給燃料を待つ間の一週間。ぼくの心は石のように冷えきったままだったし、おそらくいまでもそうなのだろう。あのとき彼女のフェイスプレートの中を見てやることもぼくには最後までできなかつたのだ。

この炎熱地獄のなかを転がり回る珪酸塩のボールに人間たちが関心を抱いたのはあるいは学術的興味のほかにある種の郷愁も手伝つてのことであつたのかも知れない。ぼくらの故郷もいずれ「ロキ」と同じ運命をたどるのだから。ただそのひとり身の星は太陽よりずっと先を進んでいて、とうに中心核の水素を燃やしつくし今度はヘリウムを融合させ始めていた。北欧神話の貧欲な狼になぞらえて「フレキ」と呼ばれる赤色巨星は直径三億キロメートル以上に膨張し、かつては地球に似て豊かな水の惑星であつただろう「ロキ」の軌道を完全に飲みこんでしまつていた。しかし大気と海水を失い、赤熱した光球の内側をゆらぎつつ公転しながらなお「ロキ」は燃えつきてはいなかつた。電離した高温ガスはその軌道上では地球大気の一万分の一以下の密度にすぎなかつたから……。

暗赤色の空の下にどこまでも続く完全に平らな大地。全天から均等にやってくる光のため足許に目をこらしても影ひとつない。もし傍らに「イカルスII」の噴射がえぐつた鈍色のクレーターがなければ身体だけ煉獄の赤い霞のなかに漂つてでもいるように思えた。うろ光景。……だがいまはへ夜だ。この遭難地点は赤色巨星内部を掻き分けていく惑星が背後に曳く影の部分に入つていて、約五時間——へ夜のない「ロキ」の自転周期は地球よりかなり短くて十時間弱だ——のへ夜のあいだは周囲一面からの絶え間ない輻射をうまく遮断し、さらに高温の物体との接触を注意深く避けてさえいれ

ば船外活動も不可能ではない。現にはくは不時着してすぐそうして外装シールドの修理をやつてのけたのだし、本来ならその間に十分『プロメテウス』観測基地からの救援をも期待できたはずなんだが——運悪く事故が重なつたために基地にはこちらにまわすバギーの余裕がなく、そしてまさにそれらのための補給部品を積んで『イカルスII』は外惑星『イミール』の衛星軌道を飛びたつたんだ。

高温の地表から着陸脚を離しておくことができない以上せいぜいあと二回の〈昼〉を越すのがせいじっぱい。そのつぎの〈夜〉には船を離れることを強いられるだろうし、そうなればたとえ靴底からの熱で宇宙服の小容量の〈ヘスピンアイス〉がパンクしなかつたとしても、間違ひなく五時間後には音速の数倍の熱風に吹かれてこんがり焼きあげられることになるだろう。いや、この〈ヘコック〉は火加減など気にもとめない奴だから後には惨めに炭化した残骸しか残らないに違ひない。

……ロディ。想像力を働かせ過ぎるとろくなことはないぞ。ぼくは悲惨な映像を頭から拭い消し、転ばぬよう慎重すぎるほどゆつくり身を屈めて足許の細かくひびわれた地面を詳細に観察してみた。延々と続く平原はかつての海洋底であり、大量の海水が蒸発した後に残された塩の大地は熱に焼き固められてまるで白大理石のように堅く締まって見える。だが、それは人間たちを陥れるためにこの星が仕掛けた巧妙なトリックなのだ。降り注ぐ陽子とアルファ粒子、そしてその他各種のイオンの……レイノルズ博士名づけるところの『こつた煮スープの雨』によってミクロの爆撃を受けた塩化ナトリウムの地表は一見強固ながらも実は崩壊寸前の多穴質の土壤なのであり、バギーの車輪によるわずかな衝撃でも突発的かつ大規模な脆性崩壊を生じる。度重なる事故によって調査計画が当初の予定より

大幅に遅れているのも、また「プロメテウス」に予備の車両がないのもまさにそれが理由なのだった。

首を振って立ち上がり「イカルスⅡ」からさしわたされた断熱ブラットホームへのステップを——ほぼ1Gの表面重力にしては幾分重い足取りで——昇りつつ、ぼくは通信が途切れようとする間際のレイノルズ博士の言葉を思い出していた。

「……技師たちはあなたがそこで一人乗りの地上用車両を組み立てられるんじゃないかと考えているわ。実は「イミール」の研究班に依頼しておいた試作品のひとつがたまたまその船に積んであるの……ただしギアボックスには手を加えなければならぬだろうし、ほかにも幾つか解決しなければならぬ問題もある。彼らはいま走行抵抗やら馬力あたり荷重やらあれこれ計算しているから、つぎの連絡までに何か具体的な指示が出せると思うわ」

彼女の口調は頼もしいものだったが、ぼくはその実現性には大いに疑問を抱いていた。ナビゲーション・システムが迷わず導いてくれたとしても基地までの千キロの道程を〈夜〉のうちに走破するには平均時速二百キロ以上を維持しなくちゃならない。だが調査区域をはなれた未踏のルートをそんなめっちゃくちゃな速度で走るなんて自殺行為以外何ものでもない。第一たとえ部品が豊富にあったとしても適切な設備なしにたった一人であの複雑な調査用車両を組み立てられるはずもないんだ……ぼくには博士の提案は到底真面目に考えられたものとは思えなかった。

*

暗闇のなかで目が覚めた。全身にびっしりと汗をかいていてほ

くにはそれがわざと高めた室温のためだけではないということがわかっていった。またあの悪夢だ……果てしない暗闇を「イカルスⅢ」が落ちていく。傍らに浮かぶぼくはエアロックにたどり着こうとするんだけど、なぜか個人用推進装置をいくら強く噴射してもその距離は縮まろうとしない……。涙の渴いた感じが頬にあったし、口のなかはまるで砂を含んだよう。ベッドを固定するための壁のストラップを支えに立ち上がり循環システムの生ぬるい水で喉を潤すと操作端末の折りたたみチェアにぐったり座り込んだ。その拍子に素焼きの小さな鈴が微かな音をたて——胸元のそのペンダントをたくした人に近いうちもう一度会うつもりでいたのに、どうやらそれも永久に適えられない望みになりつつある。

あるとき絶え間ないラムジェットの微振動も忘れ、ぼくは窓の外の新とオレンジと深紅色の擾乱に見とれていた。その距離から眺める「イミール」は——不吉な赤に染められた結晶アンモニアの雲頂までわずかに千キロメートル——巨大な血まみれの獣に見えた。すぐ足許から彼方の星空とへ続く雄大な炎の傾斜面はまるでぼくという獲物を幻惑し捕えようとでもするかのようには緩慢かつ邪悪に回転している。

談話室の戸口から軽く会釈し、居心地悪くたわんだ床面——本来その速度であるべき軌道よりはるかに低い位置にある物体にガス巨星の大質量が及ぼす潮汐作用が回転軸に対して四十五度以上それを傾けていた——をいかにも慣れた様子で下つてくると、ナオミはこちらの手を優雅に握って言った。

「ようこそ『リグ』へ」

「急に呼び立ててしまって申し訳ないです」

「いいのよ。ちょうど非番だったし……姉貴のへ婚約者へに興味も

あったしね」

ほくは赤面し、ナオミは言葉ほどの屈託も無く愉快そうに笑った。

「飲み物でも？」という言葉に首を振り、ふたり簡素なソファに对座していくらかばつの悪い短い沈黙の後彼女は尋ねた。

「星系中飛び回れる人がわざわざこんな井戸の底に足を運ぶなんて？——とも思ったから……。ところでへ軌道エレベーターへの乗り心地はどうでした？」

ほくは思わず苦笑させられた。

「アジア系の青年と会いました。『リグ・ステーション』のエンジニアだそうです。融合燃料の積み出しベースからずっと一緒に……。でもこちらに見向きもしないで押し黙ったままで、中継駅のアシステロイドへ小惑星で乗り換えるときも一言も喋らない。そこで気まずさに耐え兼ねてほくのほうから話しかけてみました……。『パイプラインが切れたらって考えたことはないのか』って」

彼女はまた笑い、その笑顔は一瞬ヒロミのそれと重なった。

「シャフト全体の重心は『イミール』上空一万キロの衛星軌道にあるから別に何の問題も起こりはしない。『リグ』はそれらとは独立に自分自身を支えていてシャフトの残りの部分はわずかに軌道外側にずれるだけだし、たとえわたしたちが切断部分より下にいたとしても惑星を周回する楕円軌道に乗って救助が来るまでの数日エレベーターに缶詰めになるだけだ、とそう言われました。もちろんそのとおりでしよう。ただしそれは理屈でね……。そうしたら、ほくのほうこそ赤色巨星の乱流のただなかを飛んでいて恐くないのかと逆に質問された」

ようやく心から微笑み、ほくは続けた。

「そこでわかりました。どうやら彼の無愛想はこちらをパイロットと知って緊張していたためらしい、と。それからうち解けて、終点までずっと楽しい話し相手でした」

「……確かにわたしたちの間ではあなたがたは一種のエリートだわ。どうしたって、融合燃料の生産なんて地味な後方支援活動ですよね」

「いや、ぼくらはただの配送人です。「フレキ」内部を飛んでいるときだってナビゲーション・システムにこき使われているだけだし……実体はイメージからはほど遠い。それにあなたたちこそ見方によつては大変な危険と隣り合わせだ……もしも何かの拍子に高度を失い上層大気に突入したら、秒速四十キロ近い速度だ。「リグ」はたちまち分解し流星のように燃えつきてしまう……」

それからぼくは口調を変えた。

「わざわざここまでやってきたのは折り入ってお尋ねしたいことがあるからなんです。つまり……その、それはヒロミの（個人情報）に関係することなんですが」

「予想がつくと思うわ……それはたぶん（子供）のこと？」

ナオミは黒い瞳でこちらの目を覗き込み、言った。

「やっぱりそうね……。でも、なぜ彼女自身に聞かないの？」
ぼくは視線を伏せてしまった。

「ずっと以前から（解除）の申請に誘っているんだけどあれこれ理由をつけて彼女一緒に来ようとしな……あるいはと思うんだけど……お互いこのところ擦れ違いでじっくり話し合う時間もとれないんだ。それに……」

「それに？」

観念して告白した。

「予想どおりだったときの自分の反応に今ひとつ自信がない」
しばらく沈黙が続き、口を開く前に彼女が微かに唇を噛んだのが見えた。

「……いいわ。隠しておくべきこととも思えないし……。ロッド、あなたの想像のとおりだわ。彼女、永久的避妊処置を受けています」

「……へ抽出く？」

ナオミはゆっくりうなずいた。

「考え方の違いでしようけど。確かにここ『リグ』だって……電磁スクープ・フィールドを摺り抜けてくる中性子の被爆は避けられない……それを承知でわたしはいつか自分自身の手で子供を育てるチャンスに賭けたのだけれど、姉は自分の遺伝子を宇宙線に晒す危険を冒さなかったのね」

「……そうなのか」

予想していてもやはりショックと落胆の表情は隠しきれなかったのだろう、ナオミはテーブルの向こうから多くの腕に触れた。

「わかるわ……彼女の卵子は百光年の彼方でへ代理人サロゲイトに管理され、あなたとの間に子供が産まれる望みはない。……それでもやっぱり姉とへ結婚くする？」

ほくは答えられず溜め息をつき、やがて彼女は椅子に深くもたれかかると深紅に染まる大海原がゆったりと回転していくのを遠く眺めた。

「ときどき思うことがある。子を産み育てる生き物であることと、宇宙空間で暮らすことはどうしたって両立しないんじゃないかって……。原始星をとりまく塵のなかで炭素化合物は誕生したって聞いたことがあるけれど、あんまりこの世界は生命にとって苛酷に感じ

られる……」

それから項の後ろを両手でさぐり、かすかに微笑んだ。

「是非あなたから姉に渡してほしいものがあるんだけど、預かってもらえる？」

薄暗い寝室灯の光のなかでぼくは小さな鈴を目の前に持ちあげ見つけた。その後任務が忙しくなって会えないうちに『イカルスⅢ』の事故が起こってしまい、ぼくは彼女との約束を果たせぬままいる。——あのときなぜヒロミにこれを渡すよう頼んだのだろうか？

「……大丈夫かね？」

尋ねられて我にかえり、いつのまにか自分が「プロメテウス」への回線を開いていたことに気づいてちよつと驚いた。

「よく眠れなかったようだね」

「ああ……いや、また例の夢です。どうやら最後の瞬間までほうつておいてはくれならしい……」

プラズマ部門の責任者であるとともに基地内の心理カウンセラーであり、さらに「テクノ・ノステイクス」の〈導師〉のひとりでもあるホアン・グリス博士は一声唸り、ぼくにはその白い眉根がひそめられる有様が目に見える気がした。

「きみが無事に帰ってきたらその件については是非ともゆつくり話し合える時間を持つべきだな。……だが今はとりあえず伝えるべきニュースがふたつ」

「博士。……悪いけどその前にちよつとお尋ねしたいことがあります」

そう言ってしまったてからぼくはしばらくためらった。

「もうチャンスは無いかも知れないので……以前からの疑問をひとつだけ。あなたご自身の信仰について質問したいんだが、よろしい

ですか?」

相手は小さな笑いを漏らした。

「エンジニアの諸君はそんな時間はないと言いたいところだろうな。だがきみはわたしのクライエントなのだし、またへ導師へとしても魂の声には時を選ばず耳をかさなければなるまい。かまわんよ、遠慮なくなんなりと聞いてくれたまえ」

「ありがとう、博士。それじゃ最初に……あなたの宗派は『グノーシス』の流れをくんでいると聞いたけれど、それで正しい?」
「正しいと言っていていいだろう。宇宙の悪の創造主として『デミウルゴス』を認める点においてね。ただし『テクノ・ノステイクス』はその名前のおりサイエンス・テクノロジーを信仰の礎にすえている。わたしたちにとって人間という存在の本質はその科学文明にあるのだ」

「それはとても奇妙に聞こえます。そもそも宗教と科学は両立するものですか?」

「両立すると、わたしは信じている」

「でも科学技術は人を必ずしも幸福にはしない。殺人兵器を作り出し、環境を汚染し……そして結局ぼくらは地球そのものを失うことになってしまったじゃないのですか?」

「そのとおりだ。科学と技術は無前提に善ではない。それは時として人間を苦しめることになるものを作り出してしまふ。だが、それでもなおテクノロジーは最終的に人間を救うことになるだろう」
「ぼくにはあなたのその信念が受け入れられないんです。どうしてそんなに確信をもって断言できるのかが理解できない」

「うーん。そうだな……」

博士は口ごもり、それでも穏やかな口調で続けた。

「例えばこの赤色巨星『フレキ』の調査のためにわれわれは若干名の人的被害さえも出している。考えてみればたかが学術的研究のために尊い人命を危険にさらすなんて実に馬鹿げたことだ。……きみはそう思つてはいないかな？」

ほくは答える前に幾度が唇を湿らせなければならなかつた。

「……必ずしもそう考えているわけじゃありません。光球内部を飛行することは危険だけれど一方で緊張感のあるやりがいのある仕事です。……でも確かにどこか、心の奥隅に完全には納得しきれない、あるいは何かものたりない部分があるのも事実です。……ひよつとしたらそれは、ほくだけの個人的な事情によるのかも知れないけれど……」

「いや、そう感じているのはきみひとりじゃない。基地内でカウンセリングをすると多くの者達が同じような悩みを持っていることがわかる——『何のために？』という疑問だ。恐らくそれは私達すべてが帰るべき故郷を失ってしまったことに原因するのだらう。われわれ人間には地球に変わる安住の地はない。……本当は誰もが心の奥底でへ大草原の小さな家で幸福に家族と暮らしたいというささやかな夢をもっている。だが、それは今は望むべくもない」

身じろぐと土鈴が再び微かに鳴つた。……それは彼女たちの民族の故郷である極東の島の土で焼かれたものであるはずだつた。

「あなたたちはその疑問に何と答えるのです？」

「〈導師〉としてはこう答えるね。……現実に直面するほかはない。それは人間が否応なく引き受けるべき存在のありかただ。なぜならこの宇宙そのものがわれわれの本来の居場所ではないから。それは仮そのの宿であり、帰るべき故郷はわれわれの夢想のなかにしかない。人間は散逸するシステムであり、増大するエントロピーのなか

で生と種の終焉まで空しく戦い続ける宿命にある、と」
「……だが、そう聞いてもあまりはくにとつて慰めにはなりそうもない」

「それじゃこう言いかえてみよう。この宇宙は悪しき創造主ヒートデスによって創造されたがゆえにその内部のあらゆる存在とともに（熱的死）
に向かつて転がり落ちつつある。生命はそのなかで唯一霊的な高み
へと志向する本質を持っているものの、その身体は物質法則に支配
されていて常にポテンシャルの（死の陰の谷間）に落ち込もうとす
る。生物進化すら一般に考えられているような（上昇）ではなくむ
しろ（下降）であり特殊化という袋小路へ続く道なのだ。……過去
恐竜を始めとする多くの生物種がそのため絶滅してもいる。カンブ
リア紀初期の大絶滅ではわずか五百万年の間に全生物種の八十パー
セントまでもが失われた。生命の可能性へのこれほどまでの無関心
……もしも造物主の本質が善であるならそんなことは起こり得ない
はずではないかね？ もっともきみが神による創造を認めるかどう
かは、また別の話だが。」

いずれにせよ、われわれ人間もやがては同じ運命をたどるはずだ
……宇宙は生命にとつてへよるべなき異郷なのであれば。しかし
科学技術はそうした苛酷な世界のなかにあつてわたしたちを保護
し、モラトリアムを与えることで魂の救済の機会をもたらす。それ
は一方で物質法則にかかわる（デミウルゲインの仕業）でありなが
ら、人間を（特殊化）の陥穽から救い出す力を持っているという意
味で霊的でもあるのだ。そして闇であるとともに光でもあるその二
元性を正しく知ることによって最終的にテクノロジーは人間を救うもの
なりうる、とわたしは信じている」

しばらく沈黙した後、溜め息をつきほくは言った。

「……ありがとう。あなたの信仰をそのまま受け入れる気にはまだなれないけれど、なんだか気持ちが悪くつきりしました」

「それで十分」感慨深げな声音で「……さてと技術者としての役目に戻って伝えなければならぬことがある。第一はきみの遭難の原因だ。われわれはきみの船の遮蔽フィルムの材質に何らかの欠陥があったのではないかと考えているんだ」

胸元の鈴を見つめていたほくは心を切替えるのに一瞬手間取った。

「欠陥……ですって？　しかし『イカルスII』はもう幾度となく『ロキ』——『イミール』間を往復している。それが原因ならとっくの昔に何らかのトラブルが発生していかるべきじゃありませんか？」

「そうとも限らないのだよ。……われわれの船の遮蔽シールドの超伝導性は磁界を完全に遮断するヘミスナー効果によって守られているわけじゃない。電気抵抗をゼロにしているのは磁束のヘビニング効果のほうだ。だが、このヘビニングの凍結は急激な磁場の変動の繰り返しには弱い……人間はまだ高温超伝導物質の組成を十分にコントロール出来てはいないからね。おそらくきみは惑星上空で突発的な磁気の嵐に遭遇したのだ」

「磁気嵐？」

「太陽風と地球磁場の相互作用で引き起こされる電磁的乱流に発生 of 仕組みがよく似ているが、しかしずっと強力なものらしい」

「でもこの惑星には地球のような磁場はないはず……」

「そのとおりだ。『ロキ』はすでに完全に冷えきっていて液状外核のダイナモ効果による磁場を持ってはいない。だがそれは——ごく希薄ながら——地殻から剥ぎ取られ電離した各種イオンの大気を持つ

ている。そしてそれらはプラズマ風の主成分である水素やヘリウムより重いため「ロキ」の周囲には定在する（衝撃波面）が形成される。

一方、赤色巨星の内部ではその脈動の原因となる非熱的で非線形なプロセスが常時進行している。この（狼の心臓の不整脈）の仕組みについてはどうか聞かしてくれよ。それこそがわれわれがここにいる理由なのだからね。……ともかく通常、対流層の最上部から放射される電磁的波動は彩層に至るまでの間に電子やイオンによって減衰されることでプラズマにエネルギーを供給する役割を担う。だが、ごくたまにほとんど減衰されることなく「ロキ」軌道の高さまで伝わって来る（ソリトン）——恒星内衝撃波が存在するのだ。そして先ほどの（定在衝撃波）とこの（ソリトン）がぶつかるとき両者に挟まれた領域で盛大な（アルフベン波）の放射をとまなうイオンと磁気の嵐がひき起こされる。たぶんきみは周回軌道上で運悪くそのど真中に飛び込んでしまったのだ」

ぼくは思わず呪詛の言葉をつぶやいた。

「……いや失礼、博士。なるほどそれが磁束の（ピンニング）をゆさぶり、ついに破壊し、そうして超伝導性が失われることで高温の（ヒートスポット）が生まれた……」

「まあ、原因がわかったところできみ自身の今の問題を解決するわけじゃないんだが、以後同様の事故を防ぐという意義はあるだろうかからね……」

「わかってます。ありがとうございます。……確か話題がもう一つあると言われましたね」

「ああ、それについては直接技術部のエドワードのほうから説明してもらったほうがいいだろうな」

博士の重厚な声に代わっていかにも实际的で快活なエンジニアの
声が聞こえたとき、不意に以前記録映像で見たドーベルマン犬を思
いだした。短い尻尾をふりながらそれは飛翔するフリスビーの後を
猛烈にダッシュしていたのだ。

「やあ、ロッド。ほくのごとは『エド』と呼んでくれ。もし嫌でな
いならね」

状況にまるでふさわしくない妙に明るく楽しげな口調で彼は続け
た。

「きみも知っているように新型の地上車両の試作品がその船に積ん
である。そこでそいつを組み立ててもらおうのだが、速度を上げるた
めに若干ギア比を大きくしなきゃならないって問題があった。ほと
んどすべての時間はその修正加工のためのプログラム作成にかかっ
たってわけ。それでようやく完成したものを今から送ることにす
る。きみはただ船載の工作機械に入力するだけでいいっていうんだ
から感謝感激してくれても罰はあたらない……ただしジュラルミン
板ぐらいは自分でセットしてくれよな」

唐突な話を一方的にまくしたてられてほくは大いに当惑した。

「だが……エド。バギーを組み立てるなんて不可能だ。タイムリ
ミットまであと十時間もないし、こちらは一人だし、そもそも船内
にそんな場所の余裕はない……」

正当かつもつともと思われる抗議はエドによって完全に無視され
てしまった。

「あー、いまからデータを送る」

それから限られた波長帯域で複雑な画像情報を処理するための空
白がしばらく続き、やがてモニターに現われた映像を一目見るなり
ほくは叫んだ。

「まさか……そんな！」

「こんなときに冗談でもないだろ？ え、ロッド」

歌うような口調はあきらかにこのへ皮肉を楽しんでる。

「だって……全然理屈にあっちゃいない！」

「ま、驚くのは無理もないけどぼくら幾度もチェックしてて計算結果にや間違いはない。きみだってよく考えればそれが唯一の手段と納得するはずだ。……ただひとつ心配があるとしたら地表からの熱伝導だが……なあにスーツのへスピンアイスへは十分もつだろうさ」

呆然としたままぼくは馬鹿みたいにモニターを凝視していた。

*

どうやら彼らはこちらが何をもち何を利用できるか熟知していたらしく具体的に周到な作業計画を送ってきた。そしてぼくが新しく製作しなければならぬものもごく小さく「イカルスII」の工作室でも容易に製作可能だったから、すべて完成するまでに十時間あれば十分だった。むしろその時のぼくにとって自分の気持ちの整理のほうがよくほど困難だったんだ。

「まだぼくには信じられないよ。本当にそんなことできるんだろうか？」

作業が一段落したとき、やっぱりぼくはエドに尋ねてしまった。「いままでぼくらは何台ものバギーを失ってきた。そしてそれにそなえて完璧な安全装備を工夫することでますます車体は重くなり逆に事故は増加した。そこで発想の転換をすることにしたんだ。脆い地面を踏み抜かないだけの軽い車体、故障してもその場で修理でき

る単純なメカニズム。……きみは心配しているようだけど速度についてはまったく問題はない。空気抵抗はゼロだし、機械抵抗は超伝導磁気ベアリングが最低に保ってくれている。ころがり抵抗は接地面積とホイールの弾性に関係し、そいつは「ロキ」の平坦な地表に最適な設計がなされている」

「……そうは言っても、何しろこれは……」

「おいおい、ロッド。もしもきみがそれを時代遅れの骨董品とでも考えているとしたら、そりゃあ心得違いというものだけだぜ」

心を傷つけられた口調で彼は言った。

「ぼくらがそのフレームのためにどれだけ構造計算とシミュレーションを重ねたかどうせきみにや想像もできないだろうがね。……ま、確かにそいつにや強力な核融合エンジンも精密な自動航法システムもない。だけど間違いなく宇宙最高の巡航速度を誇るハイテク・マシンだよ。たとえきみが慣れ親しんだ数百分の一以下の速度であってもね……。あとはきみ自身がパイロットとしての腕を見せればいいだけ。あの混乱のなかで無事に船を着陸させたロッド様だ、造作もないことだろ？」

くやしいが反論する言葉は見つからなかった。

ヘルメット内側の表示を寄り目で睨みながら、ぼくは透過波長の下限を六千五百オングストローム——水素バルマー系列アルファ線をカットするあたりまで絞った。フェイスプレートは可視光以外透過しないと技師たちは言うけど燃え立つ空の下では誰だってクールじゃいられない。それにいまや個人用ヘスピンアイスへの限られた容量にすべてがかかっていたからこそ小さな熱量だって見逃すわけにはいかなかったんだ。やがて満足するとぼくはおもむろに周囲を

見直し、『プロメテウス』への遠い地平——巨星の外層を取り巻く
明るいダストの中にフィルター効果で微かに星々が透けて見えるよ
うになった空——を眺め、背後の『イカルスII』の姿を万感込めて
目に焼きつけ……それから最後に断熱ブラットホーム上でミラー
フィルムに包まれた自作のへマシンの横目でちらりと見た。宇宙
船のメカニズムに慣れた者にとってそれはぞつとするほど原始的な
しろものだった。高弾性ワイヤーで編まれたタイヤと炭素繊維のリ
ムIIホイール、チタン合金のフレームには超々ジュラルミンの巨大
なギア。その縁の内側を向いた部分に歯車が切られドライブシャフ
トのピニオン・ギアと噛み合っている。シャフトそのものは磁気ベ
アリングで支えられ後輪のフリーホイールをギア駆動する。伝導効
率のいいローラー・チェーンが使用されなかったのは真空溶接を恐
れてのこと……技術者たちの話では金属接触面を保護する磁性流体
はあまりその表面積を大きくはできないらしい。そして……要する
にそれで全部。

自分の生命を救うべく待機しているへ一人乗り地上車——つま
り自転車——のそんな恐るべき単純さに心乱されなかったためにもほ
くは新しい宇宙服の着心地のほうに無理にでも注意を向けておくこ
とにした。このために専用設計されたというこの中世の甲冑みた
いな装備は関節の動きに対する与圧抵抗が最小になるよう工夫され
ているということ、なるほどサーボ補強された足首や膝関節の動
きはいままで経験したことがないほど軽快だった。もつとも従来の
へ軟式へ宇宙服に慣れたばかりにとつては膨張感のない着ごこちはか
なり薄気味悪かったけれど……。

そんな圧縮反発のない頼り無さに大いに戸惑いつつも手足を屈伸
させ、身体を左右にひねり……へ朝の体操へで手狭な船内での組み

立て作業で凝った身体をほぐした後でおもむろに軽合金の短い斜路を熱い地面へと下ろし——これで船載のヘスピニアイスの負担がまた増えるぞ、とぼんやり考えながらぼくは基地への回線を開いた。

「プロメテウス」……。こちらウォーカー。いまからスタートするつもりです」

答えたのはレイノルズ博士の声だった。

「ロッド。こちら全員で聞いています。みんなあなたの成功を信じているわ」

予期せず不意に湧きあがった感情に喉をつまらせてぼくは言葉を搜した。「イカルスⅡ」を離れば宇宙服の出力ではもう連絡は出ない。これが同胞への最後のメッセージとなる可能性は少なからずあった。

「ありがとう。これまでぼくを助けるためにあなたがたが重ねてきた努力に……」

「おお……やめなさい、ロッド。演説なら『プロメテウス』で聞くわ。……いいわね、無事帰還できるよう全力をつくすこと」

どうやらこの場は無愛想が無難なようだった。ぼくは何とか心を静めへ事務的な口調に切替えると最終報告をした。

「……いまから二時間後に『イカルスⅡ』を発進させるようセットしました。自動航法装置は使えないのでどこに向かっていくかはわかりませんが、うまくいけば『ロキ』の影をたどって光球から抜け出せるかも知れません」

「そうなればきつと『イミール』の『イカルスⅠ』でつかまえられるでしょう。でも、たとえ駄目でも船ならまた造ることができる。遥かに貴重なのは経験をつんだパイロットのほう。だからサイクリ

ングの安全に集中なさい。……それから覚悟しておいて。こちらについたらあなたは英雄よ。何しろ恒星の中をへ自転車へで走った最初の男なんだから」

ほくは無理して笑い、そして短く……雄々しく……最後をしめくくった。

「それでは……次に連絡できるのは基地まで五キロの地点になるでしょう。以上」

少し高い位置にあるサドルにまたがるとき鈴元で土鈴が涼やかな音をたてた。靴底の穴が熱伝導プラグに接続されるように慎重にペダルのストラップをセットし、個人用推進装置のロックを解除すると、ほくは大きく息を吸ってもういちどエドワードの警告を心のなかで確認した。

「……忘れちゃいけない。一度スタートしたらきみはもう止まれななんだ。ギア比はクランク軸毎分五十回転で時速二百二十キロメートルを維持するように設定されているからひとりでは到底再スタートはできない。同じ理由からブレーキもついていない。……前をよく見て決して転ばないようにしたまえ」

それからプラットフォームの手すりの両手に力をこめ……スラロームスキー選手が斜面に飛びこむ要領で……いつのまにかほくはスタートを切っていた。夢中でハンドルを握りしめショックにそなえ、推進装置を始動させる。腰をぐいっとひねられる衝撃。そしてつぎの瞬間、塩の大地を滑走していた。

まだペダルは使えない。それは時速百キロ以下ではあまりに重過ぎてとても踏み切ることにはできないからだ。気負ったぶんだけ所在ない気持ちでラチェットの振動を感じながら、ほくはようやくそれがいままで想像もしたことのない経験であるらしいことに気づい

た。大地を疾走するその加速感覚は……何と言うか……核融合、エンジンのそれよりずっと直接的でダイナミックだった。

ヘルメットのミラーに映る『イカルスⅡ』が見る間に遠ざかっていく。最初幾分大きめに感じたホイールの振動はすぐに感知できないほど細かなピッチになり、ついにはヘルメットのなかに響く甲高いハミングに変わった。

やがてゆっくりとペダルを押し下げることが可能になり、ぼくは自分の脚力を推進装置のイオン噴射に加え始めた。ヘルメット内部の表示にちらりと目をやり脚に力をこめる……あと五分ほどで推進剤は底をつく。

スピードの増加を妨げるものは何もなかった。塩の大地はいまや一樣な幾何学的抽象平面になりほとんど現実感もなく後ろへ後ろへと飛んでいく。そしてついに推進装置のリリースボタンを押し、その重さがスプリングによる最後の小さな反作用を推力に加えて背後に消えて行った時、ぼくは自分がこのささやかな機械のためにこそ創られた世界にいることを理解した。

「……自転車の最大の敵は空気抵抗だ。成人男子がアスファルト道路をゆっくり走っているときでさえそれは車輪の転がり抵抗より大きい。そして転がり抵抗が速度に関係なく一定であるのに対して空気抵抗は二乗の割合で急激に増えていく。大気中で自転車が時速百キロで走行できない理由はそこにあるんだ。……だけどヘロキンは大気はほとんどない。その地表は車輪で動く乗り物にとっては理想的だ。完全装備のバギーが二十キロ毎時でのろのろと走るところを、自転車でその十倍の速度で巡航することは実は簡単なことなんだ」

——驚いたな、エド。こいつはへやみつきになりそうじゃない

SOLITON

ソリトン Vol.6

双子遊び／本間祐

黒竜との邂逅／木下豊

追憶の坂／高石徹

イカルスⅡ／高本淳

笑う過度には福来る／真殿剛

■アドバイザー招待席■

中野晴行

特別寄稿

有栖川有栖

久美沙織

主宰・堀晃

か！

まるで摩擦ゼロの表面を滑っていくような官能的快感……予想も
しなかった陶酔に身をまかせ、ほくは身体と機械との心地好い連動
に次第に没入していく自分自身を感じていた。そして不意にナオミ
を亡くして以来ずっと心の奥底に重く澱んでいた何かが今きれいに
自分の中から消え去ってしまったことに気づいて愕然とする。
それは少なからずショックであり、また惨く寂しい事実には違いな
かったけれど、一方で「諦め」と呼ぶにはわずかに甘味ある癒しを
伴っていた。

とはいえ高速で疾走する緊張のなかにそうしたすべてのものはや
がて紛れ失われていき、ついには溶け合い一体となったほくら——
銀色の人と機械とは、まるで律動しつづつ流れるひとしずくの水銀の
ように、暗赤色の空と大地の間をどこまでもどこまでも軽やかに駆
け抜けていった。